

災害文化とは

災害文化研究会世話人
山崎 憲治

水害に直面して交わされる会話に、「あそこはいつでも堤防が切れるところだ」とか、「ここは洪水が来た記憶はないよ」という例が少なくない。災害を一時の衝撃にとどめず、過去を振り返り、復旧・復興の段階、あるいは予知・警報という将来も含めるトータルな災害観を求めたい。災害というのは、それぞれの地域が持っている問題や課題、あるいは弱点が、異常な力によって一気に顕在化した姿だと考えてみよう。そうすると、災害を一時の衝撃ではなく、災害には地域課題が示されており、災害を通して地域の姿を具体的に知る道も開けてくるのがわかる。さらに、復興過程ではっきりとするのだが、次の時代を映す鏡の役割をも果している。トータルな災害観を通して地域の将来の姿も見えてくる。

それを明らかにするために、戦後の日本の水害被害金額の経年の変化を見てみた。デフレートした数値の5経年変化を示すと、5つの被害額のピークが見られる(図1)。これらのピーク時には、それぞれの時代が抱える課題や社会的な背景を、読むことができる。最初のピーク時は敗戦直後。戦争中、社会資本への投資がほとんどなされなかった「付け」と、連続堤防方式では洪水を防ぎきれない状況が

露呈している。次のピークは、諫早台風、狩野川台風、そして一晩に5000人も犠牲者が出た伊勢湾台風が襲う時代。経済の高度成長前期の矛盾、おりからの建築ブームで名古屋港湾に貯木されていたラワン材が、高潮とともに人口が密集する都市を海から襲うという悲劇が発生している。次は、高度成長の地域矛盾、過疎と過密が水害に明確に現れている。1972年の七夕水害や都市近郊水害が典型例である。その後は、都市水害が地方の都市を襲うばかりか、人口減少地域「限界集落」といわれる地域が水害に度々見舞われる。一方、都市の地下施設拡大の危機、都市の複合災害の発生、避難が不能になる恐れという、深刻な危機が予想できる状況が生まれている。さらに厳しいことは、自然営力そのものが人間の経済活動・消費活動によって取り返しのつかない状況にまで変容しているのではないかという事態に直面している段階にあるということがあげられる。

災害は社会を映す鏡だという面だ。ここで共通して見えることは、経済的、社会的、あるいは体力の面で弱い人々に大きな圧力がかかっている。東日本大震災の犠牲者を5年ごとの年齢で区切って比較し

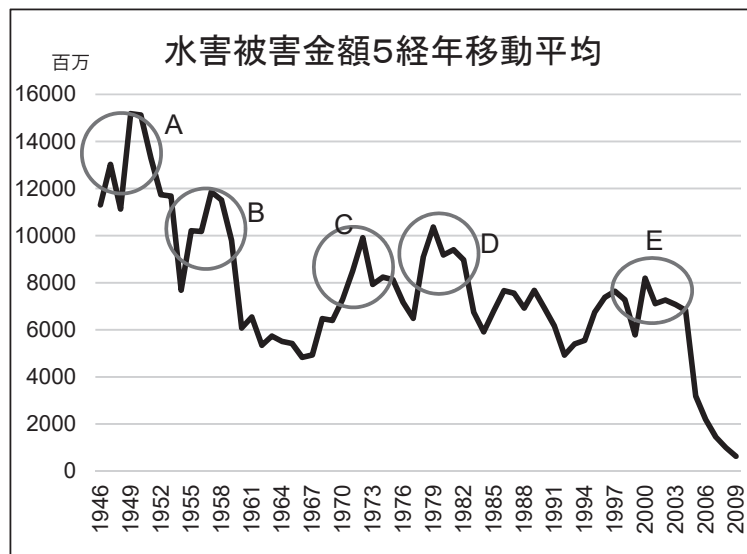


図1 水害被害金額5経年移動平均

た。犠牲者は65歳以上に集中している。高齢者は逃げ足が遅いからなのか。65歳以上がなぜ死ななければならないのか。日本の人口の約4分の1が65歳以上の高齢者だ。しかし、犠牲者の55%は、65歳以上が占めている。高齢者が自ら命を守る体制・高齢者が安全に住める社会ができていないと言える。一方で、犠牲が一番少ない年齢層は、10歳から14歳だ。この年齢は小学校3年から中学3年に当たる。学校が果たした役割は、大変大きいということ、災害学習と集団で避難できた成果の関連が示されている。災害学習の可能性をこの数値から見ることもできる。

これは、越喜来小学校の写真である。越喜来小学校は、校舎に津波が押し寄せ、体育館の天井を



写真1 被災直後の越喜来小学校

突き抜けて飛び出していった。そういったところでも、犠牲は出ていない。それはどうしてか。確かにう

まく逃げることができた。2010年12月に平田さんという大船渡市議員が、「校舎から国道に渡れる橋をつくれ」という要望を議会に出し、認められる。1月にこの橋ができて、2月にそれを利用して、避難訓練をしていた。3.11にこの橋を活用することで、子どもたちは助かった。津波が襲う場所だということを認識し対応することが、いかに重要かということがわかる。文化を「危機に直面する技術」ととら

え、災害文化を検討することが、問われている。日本には多くの災害文化が、多彩な形態を持って存在する。ここに焦点を当てて、災害を捉え直すことは、極めて肝心なことだと思う。

復旧から復興に、そして、予知・警報に向かって、さまざまな地域の災害観や自然観や、あるいは、治水技術というものを積極的に生かしていく。あるいは、避難訓練やボランティア活動も災害文化という範疇で捉えることも可能だ。災害情報をリニューアルしどう地域に定着させるかも課題にあげられる。他地域との関係、情報交換に止まらず、実際の支援・復興も含めて、相互関係が問われている。災害文化の視点を抜きにしたなら、災害は激化するに違いない。先ほど弱点を強くするという課題を示した。

岩手県の葛巻という地域、ここには新幹線も温泉などもない。しかし、北風とやませに耐え抜いた地域である。その風や冷涼な環境を「逆」に利用して、風力やバイオマス等で、電気エネルギーを生んでいる。住民の使用する電気の1.6倍。マイナスをプラスに転じた事例になるが、こういう視点も肝腎だ。

災害文化の醸成と伝播が問われている。地域の課題を知りそれをどう克服するかによって、災害は変わってくる。復興過程で自分の住む地域に対する自信と誇りを、そして、生きがいを見出していく。さらに、それを強固にするということが、地域の価値を高めていく。災害文化を問うことは、地域をもつと可能性のあるものに転じていくものになると思う。「艱難辛苦汝を玉とする」という諺を、災害文化を問う、重要なキーワードとして押さえておきたい。

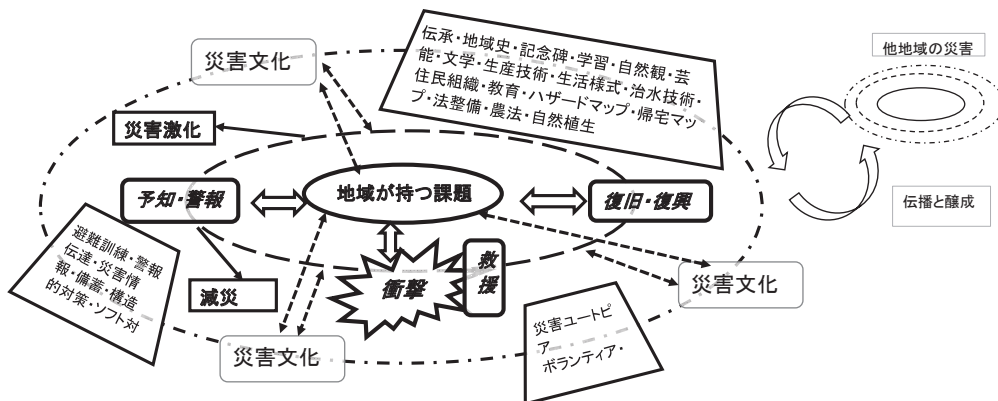


図2 トータルにとらえた災害概要図